

# 主権を取り戻す当たり前のことが語られる時代へ

在仏コラムニスト 安部 雅延

## 「国を取り戻す」という遺言

アメリカの保守の言論を代表する米ウォールストリートジャーナル（WSJ）は、暗殺された安倍晋三元首相について、アベノミクスや日米同盟強化で貢献したと指摘した一方、戦勝国アメリカらしく、アジア近隣諸国に緊張を与えたと書いた。

まず、WSJは「安倍氏は日本の政治家や有権者に対して、世界における日本の立場に関する困難な問題を直視するよう迫っていた」「北朝鮮や台湾有事など、地域的な脅威を抑止するため、日本はアメリカと核を共有すべきかどうかを巡る議論に火をつけようとしたのだ」と指摘した。

同時に「安倍氏は必ずしも、こうした政策の提唱者として現実には、それほど効果を上げられなかった。特に、戦時中のひどい歴史の一部に関する同氏の国家主義的な口調は、アジアの近隣諸国に無用な緊張を招いた」と書いた。

「戦時中のひどい歴史」「国家主義的口調」とは、自国に戦争を仕掛けられたアメリカ人が持つ従来の見方だ。それにアメリカのメディアは、日本で使

われる「ナショナリズム」という言葉を昔から「民族主義」に置き換える傾向もあった。

安倍氏にもその民族主義の匂いを感じていたのかもしれない。しかし、アメリカが分かっているのは、ドイツ同様、日本も戦後、戦勝国側による封じ込め政策によって「戦争をさせないための憲法や平和主義」を強要され、主権国家の基本である意思決定の独立性、自主防衛能力の保有を許さない状況を半世紀以上続けてきた異常さだ。

結果として、日本人がアイデンティティ・クライシスに陥ったことを欧米諸国は理解していない。過去の同盟国ドイツもポピュリズム政党「ドイツのための選択」党が台頭し、ウクライナへの武器供与を他の北大西洋条約機構（NATO）を介してしかしていないのも、不戦と平和主義を叩きこまれた結果というしかない。

国民国家のアイデンティティは長い歴史に育まれたもので、誰もそこから自由になることはできない。歴史のないアメリカには理解しがたいことだろう。無論、歴史や伝統にはいいものも悪いものもあり、日本もドイツも改善すべき点は多々ある。

たとえば、「村社会の内向き志向」はその典例でドイツと似ている。アジア諸国にも見られる内向き志向だが、世界の中で日本及び、日本人がどうあるべきかを考えるべき時代の足かせだし、日本はかつて海外からの学びが発展の原動力だった。

日本は明治維新後、近代化に成功し、戦後、長期に渡り経済発展を遂げ、自由と民主主義を定着させた。その成功は日本の歴史の中に多くの優れた人物がいたからだった。失われた30年などというが、今ほど日本が世界的に高く評価され、なおかつカオス化する世界の問題解決へ、貢献を期待されている時代は過去にはない。

それに気づいた故安倍氏の世界情勢と、日本の立場を踏まえた戦略的外交姿勢は間違っていたとは思えない。それは筆者が30年に渡り世界を見てきた経験からしても、極めて常識的で正当な考えだ。強いて言えばその優等生ぶりが、時として周辺国の嫉妬を生んでいることに気づかないという意味では、配慮が必要だったのかもしれない。グローバル化の挫折は、各国に存在する長い歴史と文化を簡単に超えられると誤解したことにあつた。グローバル

リゼーションは歴史のない人工的に作られたアメリカが主導し、デジタル化が拍車をかけた。だが、そのアメリカの野蠻ともいえる腕力による普遍的価値観の押し付けは、歴史の長い中国やロシアに不快感を与えたのも事実だ。

札東と軍事力で相手の頬をはたくような態度は、間違ってもすべきではないだろう。自国内が弱肉強食で、常に一番をめざす競争社会だからといって、それを世界に拡大するのは問題だ。

## 自主性が問われる時代

アジアで唯一、長年、先進7か国(G7)のメンバーで、欧米のロジックだけでは解決できない問題について、日



本のリーダーシップは重要さを増すばかりだ。なのにITにかまけた若者からは国家という意識が消え、極めて個人的で身勝手に明確なアイデンティティもない精神状態が蔓延している。

それもこれも本来主権国家であるべきなのが、その基本となる国家の意思決定において常にアメリカにおもねり度し、更には国連で長年、アメリカに次ぐ分担金を課せられながら、安保理常理事国から排除され、敵国条項も削除されていない、情けない国になったからだ。

自国の文化歴史を大切にしながら改善をくり返すことは、右翼でもなければ民族主義でもなく、極めて健全なことのはずだ。自主

防衛力強化を主張し、自由と民主主義を信じる国との連携強化で行動した安倍氏の主張は、主権国家の当たり前前の国づくりの議論だったし、改憲も当然の流れだ。近隣諸国に緊張を生んだというの

は、小学校から反日教育を怠らない中国と韓国だけの話で、彼らは日本を悪の国として利用し、踏み台にして発展してきた哀れな国だ。日本がアジアと世界へのプレゼンスを増していくと都合が悪いから騒いでいるが、嘘と盗み、そして相手を貶めることで発展してきた国を相手にする必要はない。

過信は良くないにしても、日本は自信を持ち、その規範の高さを保つことが重要だが、教育とジャーナリズムが日本の精神文化をダメにしている。今後、他国の顔色を伺い、意思決定まで委ねるような態度は徹底して排除すべきだろう。

過去の歴史で、日本を立派な国に引き上げた人物の多くは優れた海外経験者だった。今、日本は再び、グローバル・マインドを持った優れたリーダーを必要としている。その一人が故安倍晋三氏だったことは間違いない。

世界的視野、日本人としての明確なアイデンティティを持ち、国際情勢を正確に把握しながら、日本及び自分が何をすべきか、という高い見識を持つて行動する人間が待望されている。多くの若者、とりわけZ世代といわれる若い世代に、それとは真逆の人間が増

えているのは深刻だ。

興味深いと同時に残念なことは、安倍氏への評価が日本国内より国外で高いことだ。たとえば、ケネディ米大統領暗殺事件後、共和党を含め政治的に対立していた勢力も、ケネディ大統領を高く評価し、喪に服した。

日本では安倍氏を国葬にすべきという主張に強く反対する意見が出ており、メディアも一方で安倍氏を評価しながらも、モリカケ問題や桜を見る会へのネガティブな批判を必ず付け加え、安倍氏を極端に嫌った左翼勢力への配慮を続けている。

選挙で世論が安倍氏を圧倒的に支持しても、国葬に反対する勢力によって国論は二分されている、とメディアは嘘の報道をする。しかし、この30年、海外から日本を見続けてきた筆者にとって、安倍氏は衰退してきた日本を救った人物であることは間違いない。

北朝鮮の核の脅威、ロシアのウクライナ侵攻に刺激される中国の台湾有事が懸念される日本は、いつまで戦争のトラウマに支配され、自主防衛という主権国家の最低条件を放棄し続けるのだろうか。日本もドイツも本場の主権を取り戻す時がきている。